



筑紫女学園大学リポジット

戦後朝鮮語教育への萌芽
— 関西在日韓国学校の初期設立を中心に —

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 羅, 義圭, 朴, 星奇, LA, Euikyu, PARK, Seongkee メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1169

戦後朝鮮語教育への萌芽 —関西在日韓国学校の初期設立を中心に—

羅 義 圭・朴 星 奇

The Beginnings of Postwar Korean Language Education: Focusing on the Early Establishment of Korean Ethnic Schools in Kansai

Euikyu LA and Seongkee PARK

はじめに

日本と韓国は「歴史認識」をめぐる関係が改善されるどころか、より一層溝が深まるばかりである。それは恐らく揺るぎなき「加害者」と「被害者」の二項対立的構図のなかで束縛され、「歴史認識」を物語っているのが大きな要因として取り上げることができるだろう。この政治的流れの中、「在日」は両国間の狭間で揺り動かされつつ自分たちのアイデンティティを求めて、日本社会で生きつづけている。戦後、「在日」は日本社会で抑圧や差別を受けながら「生存」のために自分たちの人権を訴え、今はその権利を勝ち取りつつあると言っても過言ではないだろう。

一方、在日コリアンの数は1991年の69万3,050人をピークに毎年減少を続けている。1978年末に65万9,025人、外国人全体の85.9%を占めていた韓国・朝鮮籍者も、2004年末には60万7,419人、外国人登録者全体の30.8%となった²と言われている。その減少要因は在日コリアンの帰化とともに、1985年9月22日のプラザ合意をきっかけに日本はバブル経済が到来し、国内の労働力不足に陥った。そのために、外国からの労働者を積極的に受け入れたことが大きな要因だと思われる。

これまで戦後朝鮮語教育は「制度的側面からのものが主であった」³と言われているが、学校教育の一つの側面は、言語・言説能力を基礎とし、世界や他者を操作・支配していく能力として「自律性」や「主体性」を解釈するように子どもたちを塑型していくことである。他者よりいろいろなことを「知っている」ことが他者支配の要点になるのだ。しかも学校教育が評価をとまなうこと、その評価はあくまで個人をベースに行われることが「自律性」と「主体性」を個人を基盤としてしか考えられない心性を作り上げていく。子どもたちは生まれた直後から大人たちの言語に

さらされ、それを習得していくが、子どもたちの初期の言語活動は自分を「ゆり動かす」ものに対する反応でしかない。しかし、ある時期から子どもたちは大人の言語世界、分節化と均質化を通して世界や他者を二項対立としてとらえる言語世界を身につけていかざるを得ない。この言語世界は書記言語の教育を通して主に学校教育で教え込まれる。ただその教育は、特定の教科で学習項目として明示的に教え込まれるのではなく、教師を代表とする周囲の大人たちをいわば「親方」として徒弟制度的に刷り込まれるものだ。つまり、言語能力のエンパワーメント、そこでのマジョリティ側の子どもたちが身につける書記言語は、どうしても言語に関しても言説に関しても「暴力」につながってしまう。

しかし、「在日朝鮮人」の子どもたちがとりうる言語・言説へのアプローチを通して自己の確立、一般にいう自律性や主体性を言語による他者支配を通して達成するのではなく、他者との差異の尊重に基づいて、他者との関係性の確立のために使う途を探ることに大きな意義がある。その根っこになる世界と他者から揺り動かされるという経験、あるいは世界や他者に感動させられること、自分と思っていたものが根底から覆されること、そういう「経験」に価値を見る文化であるからこそ、「在日朝鮮人」の子どもたちの朝鮮語習得は主体的・自律的に語ることができるのだ。

本稿では、これまで戦後朝鮮語教育関連著書や論文は主に在日本朝鮮人総联合会（以下、朝鮮総聯）と密接な関係をもつ朝鮮学校であったが、筆者たちの国籍による制限もあり、在日本大韓国民団（以下、民団）系学校である白頭学院建国幼・小・中・高等学校（以下、建国学校）、大阪金剛インターナショナル小中高等学校（以下、金剛学校）、そして京都国際中・高等学校（以下、京都国際学校）を中心に、在日韓国学校の初期の様子を取り上げながら「書記言語能力」について考えてみたい。

1. 日本の敗戦から民族学校閉鎖までの流れ

1945年8月、韓国⁴が日本の支配下で解放された当時、日本に居住していた在日朝鮮人は210万人に達した。彼ら・彼女らは解放後、韓国に帰国した人もいる一方、朝鮮半島の不安定な情勢に帰国への戸惑いを抱えた在日朝鮮人もたくさんいた。そこで、在日朝鮮人が直面した問題の中で、一つは子どもたちの教育であった。万一、祖国へ帰る場合、日本で生まれた子孫が「朝鮮語」を知らないことは親にとっては大きな悩みであったと思われる。そのため、日本で生まれた2世の朝鮮語教育を行おうと、日本各地で「国語教習所」⁵が開設されたのだ。鄭榮桓によると「すでに1946年10月の時点で学校数が⁵500校を上回り、生徒数も4万人を超えている。」⁶と述べている。当初、日本政府の朝鮮語学校の方針については「明確な法的地位はなく、放任の姿勢や明確な法的地位はなかった」と指摘されており、さらに呉永鎬は次のように述べている。

1946年初頭の段階では日本に在留する朝鮮人の法的地位を占領当局によって明確に示されて

おらず、またそもそも戦後日本の教育法制自体も未整備の状態であったため、文部省は全国に叢生した朝鮮学校への対処を決めかねていた。⁸

上記のように、当時の朝鮮語学校の立ち位置を通して、敗戦による日本の社会秩序がいかに混乱しているかを垣間見ることができよう。植民地時代に朝鮮人は「国・言葉・歴史・文化等」を強制的に奪われ、「日本人」として生きていかなければならなかった者が、日本の敗戦とともに自分たちの民族性を取り戻すために真っ先に取り組んだのが「学校」を立ち上げることであった。その後、1947年4月から教育基本法および学校教育法の発布・施行によって新学制が実施され、小学校・中学校が発足し、占領軍の指導下で戦前の軍国主義教育からの脱却と民主化が図られた⁹と韓東賢は述べている。朝鮮学校の学制は6・3・3・4制となっており、設立当初から日本の学制に準じている。さらに、韓によれば、「冷戦が本格化する以前のこの時期、消極的とはいえ、政府・文部省も在日朝鮮人の教育の実施をなかば容認していた¹⁰」との見解を述べている。

しかし、1947年後半から情勢は一変する。冷戦体制へ急激に突入することで米占領軍の指令のもと、日本政府は朝鮮学校について、「日本国籍を持つ者たちの学校であるため教育基本法および学校教育法のもとにおかれなくてはならないという立場を明確に打ち出し¹¹」、「〈排除／同化〉へと舵を切り始めた¹²」と韓は見解を示している。結局、48年1月の文部省通達により、朝鮮語学校は閉鎖に追い込まれることになる。

戦後、「朝鮮学校」を題材にして執筆したものは主に、日本社会の差別への「抵抗」や「民族性の復活」そして、「祖国志向」への強い気持ちを表していた。しかも、前述したように朝鮮総聯と密接な関係をもつ「朝鮮学校」に焦点を当てて書かれたものが大半を占めている。これまでの朝鮮語学校関連の研究成果に敬意を表する一方、筆者は後で朴星奇氏が述べる「建国学校、金剛学校、そして京都国際学校」での学びを通して、「書記言語の教育」のあり方について考えてみたい。

2. 書記言語能力とは？

私たちが書記言語能力と呼ぶものを身につけるのは、どのような過程を経るものだろうか。確かに私たちは、小学校レベルで日本語の書記言語の素材とでも言うべきもの、文字やそれを使って文を書く能力、文を繋ぎ合せてある程度の長さの文章を書く能力は身につける。しかし、それだけで社会的に機能しうる書記言語を身につけたとは言えないだろう。書記言語能力とは、恐らく長い間の学校教育を経て社会人になってからも訓練されることによって身につくものだ。

なぜそんなに長い時間が必要なのだろうか。それは書記言語能力には素材としての文字や文や文章を読み書きする能力だけではなく、その社会に流通している価値観、それもその社会の主流の人びとが暗黙の前提としている価値観を表すような思考枠組みに則って読み書きする能力が必要なのだ。この「価値観を表すような思考枠組み」は一種のテキストの形で述べる事が可能な

ので、それにここでは「言説」という用語を使っておこう。

書記言語能力の習得に高等教育から社会生活に至るまでの長期間の訓練が必要なのは、書記言語能力が単に文章を書く能力だけではなく、その社会の言説に則って書く能力までを含むものであり、それを身につけるのに長い期間が必要だからなのだ。言説能力までを含む教育は普通学校教育で行われる。そもそも学校教育の究極の目的とは、一言でいえば子どもたちに言語能力、とくに書記言語能力を身につけさせることにあると言ってもいい。だからこそ書記言語能力を身につけるには一定期間の学校教育に身をおくことが必要になる。もちろん学校という機関でなければならぬことはないが、それに近い形の教育を受ける必要がある。

ここで「身をおくこと」と言ったのは、学校教育で身につけるものは決して様々な学習項目だけではなくて、そういう学習項目を学ぶ過程で身につける言語能力（書記言語能力）であるからだ。学校教育において最も重要なのは、算数や理科や社会等の教科を学び、知識・技能として身につけることではなく、その学習を教師や教科書（一般的に言えば書き物としての書物）や仲間の学習者との関係性のなかで行うなかで、言語能力を社会化していくことなのだ。言語の文法構造、音韻構造等の言語学という基礎能力は、ほとんどの子どもたちが学校教育に入る前に身につけている。学校教育が提供する言語能力は、それを社会化していくこと、つまりその社会の持つ言説の体系に合わせて運用していく能力なのである。これは朝鮮語の授業についてもそうであって、決してそこでは朝鮮語が教えられるのではなく、朝鮮語の社会に合わせた運用が教えられているのである。韓国民族学校での朝鮮語教育はまさに「書記言語能力」に重点をおいて行われたが、これは大きな示唆をもたらす。

但し、この言語の社会化は、学校教育の全体の中で、それぞれの学習項目のような形で教えられるのではなく、むしろ学校という共同生活の中で、その関係性の中で、いわば徒弟制度的な訓練を経て習得されていくものと考えられる。この辺りのことを教育社会学者の志水宏吉がフランスの社会学者ピエール・ブルデューの「ハビトゥス」という考え方をを用いて以下のように説いている。

ブルデューによれば、文化資本には、三つの形がありうるという。「客体化された形」「制度化された形」「身体化された形」の三つである。「客体化された」文化資本とは、家庭のなかにある文化的なモノ、具体的には「本」「楽器」「美術・骨董品」などを指す。二番目の「制度化された」文化資本とは、親の「学歴」や各種の「教育や各種の「教育資格」を指す。そして三番目の「身体化された」文化資本が、ブルデューの議論のカギをなす部分であり、それは「ハビトゥス」という言葉で表現されている。

この「ハビトゥス」という概念については、若干の解説が必要であろう。ハビトゥスとは、「実践的に習得された、知覚された、知覚や行動の生成の原理」とか「慣習行動を生み出す諸傾向」などといった言葉で説明されている。言い換えるなら、ハビトゥスとは、長期にわたる学習・反復の結果として、ある個人の身体に備わっている「構え」のようなものである。¹³

さらに、志水は「その際に強調しておきたいのは、言語コードにせよ、学習にかかわるハビトゥス（以下、「学習ハビトゥス」とする）によせ、それは意図的な働きかけを通じてというよりも、ある環境のなかで子どもが「自ずと」学びとっていくという性格がより強いもの、ということである。」¹⁴と述べており、書記言語、そしてその中の重要な部分を占めている言説に関する能力について、ここで志水が説明していることがそのまま当てはまると思われる。

多くの言語学習者は、書記言語能力を「個人」の能力として捉えている。確かに学校で教えられる教科の学習項目については、その学習によって得られる知識や技能が個人の能力として蓄積されると考えられている。しかし、書記言語能力を成人した学習者が学校教育を経ずに個人として身につけるのは恐らく難しいことなのだ。さらに、学校という共同生活の中で、その関係性のもとで習得していくという点にポイントがある。社会生活の中では、協同しながら言語生活を営むことはさほど例外的なことではない。現に私たちは、自分が得意ではない分野での言語活動に他者の力を借りることはよくあることである。また、社会を覆っている言説に異議申し立てをする時、社会を支えている言説に違和を感じた時に、それを変えていく活動は個人では不可能である。したがって、それを変えようとした時、それに異議申し立てをしようとする時、まず周囲の仲間から様々な話し合いや討論を経て、協同の言語活動をすることから出発するしかない。そこでは、言語能力に差があっても、互いにその差を補い合うことが必然でもあるし、当たり前のことでもある。

しかもここで重要なことは、そういう協同して言説に対する異議申し立てを行うような能力、あるいはそれを支える言語能力とは、「教える」ものではないということである。子どもたちのもっとも深いところでの問題解決能力、自分たちの良心をどう形成し、それに従ってどう協同生活を営むかを決定するという意味での問題解決能力は、「教える活動」を通して「教えないこと」によって育成していくしかないのである。まさしく、先に引用した志水の文章で取り上げられていた「ハビトゥス」なのであるから。

すでに筆者は、戦後朝鮮語教育についての研究は「差別への抵抗・民族性の復活・祖国志向」が強いと述べた。しかし実際、民族学校で行われた「朝鮮語教育の中で書記言語教育」についての文献は皆無に等しいと言っても過言ではないと思われる。筆者が本稿で取り上げた「書記言語教育」とは、他者との差異の尊重に基づき、他者との関係性の確立のために使う途を探ることであり、その根っこになる世界と他者から揺り動かされるという経験、あるいは世界や他者に感動させられること、自分とと思っていたものが根底から覆されることにより、「暴力を伴わない言語習得の可能性」¹⁵を考えたいのだ。

3. 「違和」への触発

マジョリティの子どもたちは、差別やいじめなどを通して言語・言説能力が他者を操り支配するための能力であり、それが自分のエンパワメントの大きな部分をなすと考えるようになって

いく。そのエンパワーメントはしばしば「自律的であれ」とか「主体性をもって行動せよ」という、私たちの社会で近代以来の根本的な言説に接続されていく。学校教育の一つの側面は、言語・言説能力を基礎として世界や他者を操作・支配していく能力として、「自律性」や「主体性」を解釈するように子どもたちを塑型していく。

他方、マイノリティの子どもたちにとって、言語・言説能力の習得はどのような働きをするのだろうか。まず、最初を考えておかなければならないことは、子どもたちはマジョリティであれ、マイノリティであれ、どの子どもも言語・言説による二項対立的な枠組みに自分を押し込まなければならないことに強烈な「違和感」を持っているということである。恐らく子どもたちは、世界や他者を大人のように言語による分節化と均質化の作用を経た概念的世界として見てはいないのである。子どもたちは、自分を取り巻いている世界や他者を連続的な変化をするものと捉えているはずだ。ただその中で、自分をケアしてくれる人間や自分を喜ばせたり驚かせたりする事物に、自分を「揺り動かされる」経験をしているだけだ。しかしある時期から、子どもたちは大人の言語世界、分節化と均質化を通して世界や他者を二項対立として捉える言語世界を身につけていかなければならない。この言語世界は、書記言語の教育を通して主に学校教育で教え込まれる。ただその教育は、特定の教科で学習項目として明示的に教え込まれるのではなく、教師を代表とする周囲の大人たちを、いわば「親方」として徒弟制度的に刷り込まれるものであることは先に述べた。しかしこの刷り込みに対して、子どもたちは強い違和感を持つ。その違和感を容易に乗り越える子どもたちは「よくできる」「成績のよい」子どもたちになる。結局、この子どもたちは世界や他者から自己を引き離して、それらを対象として見ることを身につけていく。しかしこの道は、自分の生きられた経験から自分を切り離して、言語・言説によって世界と他者を操ることに通じる道である。この戦略は学校教育では推奨され、賞賛される戦略である。なぜなら、このような世界と他者へのかかわり方は、「客観的」で「科学的」で「学問的」なものの見方に通じると考えられているからだ。しかしその違和感にこだわり続ける子どもたちもいる。まさに日本社会でマイノリティとして生きることを強いられている朝鮮の子どもたちは、常に傷つきやすい環境の中で緊張しながら、自分の「アイデンティティ」に苦悩し生きていく存在である。

マイノリティ環境の子どもたちは、その価値観と自分のマイノリティ性との矛盾を何らかの戦略によって解消しようとする。その一つの戦略は、マジョリティにはなれないという諦め競争から脱落していくことである。これは、マイノリティ性がエスニシティ／ナショナルリティや障害、あるいはジェンダーの文化対立軸のように、表面的に表れてしまって隠しようがない時にしばしば起こる。もう一つは、マジョリティの子どもたちに負けない、あるいはそれ以上の言語・言説能力を身につけ、マジョリティ社会の中でマジョリティ以上の卓越性を持つという戦略だ。この戦略は、マイノリティ性が表面に表れない場合には、それを隠すという場合と隠さずマジョリティの子どもたちとの競争を行う場合がある。どちらの場合でも、先に述べた自分の生活からその競争の場を切り離すこと、自分の経験から語るのではなく、

抽象的にものごとを語るというサブストラテジーが使われることが多い。

しかし、筆者はマイノリティの子どもたちの言語と言説の習得に関するストラテジーを、黒人女性であるベル・フックスがアメリカの文芸批評家テリー・イーグルトンの説を引用する形で次のように述べている部分に着目したい。そのストラテジーは違和感を消したり、隠したりするような乗り越え方ではなく、その違和感に基づいてそれを育てながら言語・言説能力を身につけていく乗り越え方だ。

I came to theory young, when I was still a child. In *The Significance of Theory* Terry Eagleton says: Children make the best theorists, since they have not yet been educated into accepting our routine social practices as “natural” and so insist on posing to those practices the most embarrassingly general and fundamental questions, regarding them with a wondering estrangement which we adults have long forgotten. Since they don’t yet grasp our social practices as inevitable, they don’t see why we might not do things differently.¹⁶

(私が理論というものに目覚めたのは早く、まだ子どもの頃だった。テリー・イーグルトンは著書『理論の意味作用』の中でこう語っている。子どもたちは、最も優れた理論家である。というのは、彼らは我々の決まり切った社会的習慣を「自然な」ものとして受容するようまだ教育されておらず、我々大人たちが長い間忘れてしまっている。「自然らしさ」と習慣との奇妙な離反に恥ずかしいほどに当たり前で根本的な疑問にこだわり、注視するからだ。子どもたちは我々の社会的な習慣をまだ当然なこととして捉えてはいないので、どうしてそのようにしか振る舞わないのかを理解しない。：筆者訳)

上記で、フックスやイーグルトンによると、子どもたちは大人たちが毎日の社会的習慣の中で、「当たり前(=決まり切った社会的習慣を「自然な」ものとして受容する)」だと思っていることに違和感を持つという。それは、まだ教育を受けて社会化されていないからだ。逆にいえば、大人たちがそういう違和感を忘れてるのは教育の成果だというわけだ。社会は様々な制度から成り立っているが、その制度を作り上げる基礎にあるのも言語であり、その分節化と均質化の作用なのだ。それに対する違和が「大人たちのやっていることは何か変だ」という社会への違和になっていく。ところが、その「何か変だ」という感じを持ちつづけるのは、「お前にとって得にならない」として矯正していくのが教育であり、その違和をどうにか飼いならし、社会制度にまで至る概念言語の世界が「当たり前」だと思わせるのが言説の作用なのだ。

フックスはそういう違和を母親や周りの大人たちにぶつけたという。しかし親たちは「そんなこと考えるんじゃない」というばかりだった。だからしかたなくフックスは自分で考えた。自分でどうにかその違和感を説明してみようとした。そういう「自分で考え説明しようとする」こと、つまり主体的に対処することをここでは「理論」と言っている。フックスが「I came to theory young, when I was still a child.」と書いているのはそういう意味である。

このような「違和感」を、在日韓国学校に通っていた子どもたちは日本社会においてこだわり続け、さらに世界と他者から揺り動かされるという経験を朝鮮語教育を通して体験できたのではないだろうか。

4. 関西韓国学校¹⁷

文字というものを通して子どもたちが世界を表現することに喜びを感じることは否定できない。学校教育は、子どもたちのそういう感動を育て、その基礎の上に書記言語能力を開発している。現在、日本で在日韓国・朝鮮人が通っている教育機関は、大きく「民団系学校と朝鮮学校」¹⁸として位置づけることができよう。朝鮮総聯と密接な関係を持っている朝鮮学校は現在、日本で正式な学校ではなく、各種学校の資格で存在している。民団系学校は、韓国政府から正式に教育機関として認定されている。東京韓国学校、京都国際中・高等学校、大阪白頭学院建国幼・小・中・高等学校、そして大阪金剛インターナショナル小・中・高等学校だ。この中で、京都国際学院、建国学校、金剛学校は日本政府からも一条校で認定され運営している。本稿では、日本社会で正式な教育機関として運営されている関西地域の三つの学校の初期設立の姿と学校校歌について考察したい。日本で一条校として運営しているため、日本語で授業が行われているが、学校設立理念と密接な関係がある校歌を調べることは、羅義圭氏が前述したように、「書記言語教育」への新たな在り方について、考える大きな起爆剤になると思われる。

(1) 白頭学院（建国幼稚園、建国小学校、建国中学校、建国高等学校）

大阪市住吉区遠里にある建国学校設立には白頭同志会¹⁹の存在があった。1945年、神戸でゴム工業と製材所、船舶関連事業をしていた曹圭訓会長と厳鐘韶社長の播磨ゴム合弁会社が文化団体として白頭同志会を結成した。白頭同志会では、1946年3月に白頭学院を設立した。4月に男子学生を対象とする建国工業学校と、女子学生を対象とする建国高等女子学校をスタートさせた。創立者の曹圭訓と初代校長の李慶泰は人間社会では公的資格があるべきだとし、国際的に通用する学校でなければならないと考えた²⁰。白頭学院の設立趣旨は次の通りである。

再建された祖国を民主的で、平和な文化国家として創るにあたり、世界平和と人類社会に寄与できる民族教育のため、在日同胞子弟に必要な教育を行う教育機関の設置は大変重要で急を要する義務であることを痛感する。

しかし、この事業は順序としてその基礎になる小・中・高の基礎教育機関がなくては到底所期の目的を達成することができないと言わざるを得ない。

このような見地から有志一同の合意の下、本法人を設立し在日同胞子女の教育を実施することにより、祖国の文化建設という目的達成に寄与しようと思っているのだ。²¹

白頭学院のこのような設立趣旨は現在、在日韓国・朝鮮人社会で推し進めていかなければならぬ指向であるとともに、1946年当時の設立趣旨をそのまま受け継いでいる。以後、1年を経て学制を改変し、建国中学校を設立した。さらに、1948年には建国中学生21名を受け入れ、高等学校を設置した。

設立当初、在日朝鮮人によって自発的に創立された教育機関は、日本社会で無資格教育機関だった。しかし建国学校は日本政府が正規な学校法人として認定した在日朝鮮人対象の最初の民族学校だ。建国学校は、1949年設立初期から小・中・高等学校すべてが日本社会で正式に学歴が認められる学校だったために、正式な学校あるいは学歴を希望する在日朝鮮人社会の人々が自分の子どもを建国学校に行かせた。建国学校は、解放の政局で社会主義も右翼のどちらも標榜していない中道教育を掲げた。「祖国は南にしろ、北にしろ、すべて我々の祖国であり、将来統一するのにどうして自分が分断され二つに分けられるのか。祖国はどこまでも一つ」という二人の創立者の考えだった。

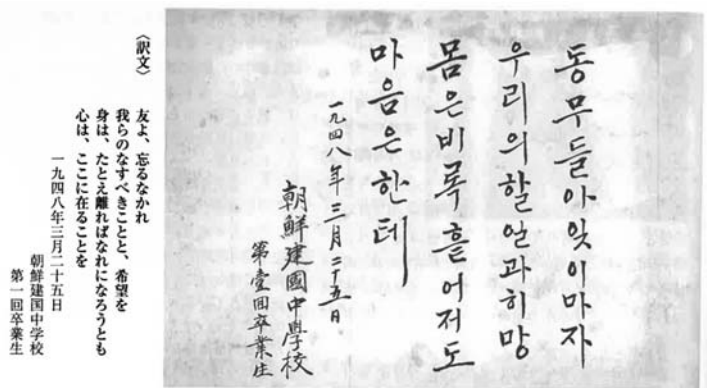
現在、歌われている校歌にも朝鮮半島、すなわち祖国のことを思う在日朝鮮人としての意志がよく表れている。日本社会で生きながらも祖国を忘れず、世界人として生きていこうとする意志を込めた校歌の内容は次の通りである。

白頭 金剛 靈峯은 우리의 기상
 鴨綠 豆滿 흐름은 우리의 발전
 錦繡江山 三千里 無窮 낙원에
 문화의 金字塔를 굳게 세우세
 건국 건국 우리 학원 건국 건국 우리 학원
 길이 길이 영원토록 빛난 영광 가득하리²²

白頭 金剛 靈峯はわれらの気概
 鴨綠・豆滿の流れはわれらの發展
 錦繡江山 三千里 無窮楽園に
 文化の金字塔を強く建てよう
 建国 建国われらの学院 建国 建国 われらの学院
 末永く永遠に輝く光栄あれ

校歌に登場している「白頭と金剛」は韓国を代表している名山だ。白頭山は標高2744m、朝鮮半島で一番高い山で、南北のすべての山を合わせた民族の代表的な山であり、朝鮮半島の北にある。韓国国歌にも登場する。

北朝鮮では金日成の抗日武装闘争を象徴している革命的な山として崇められている場所だ。金剛山は朝鮮半島の軍事境界線の北に位置しており、朝鮮半島で一番美しいといわれる指折りの山だ。昔から金剛山をテーマにした多くの文学・芸術作品が残っている。



〈1948年朝鮮建国中学校第1回卒業生の文章〉

「鴨綠と豆滿」は朝鮮半島の北にある川でそれぞれ白頭山の天地に源を發する川だ。鴨綠江は白頭から西へ流れながら中国と国境を接し、中国の丹東と北朝鮮の新義州の間を流れ海に至る。豆滿江は中国との国境を界しながら東へと流れ、ロシアの国境地帯を流れて海へ合流する。「錦繡江山」とは、文字通りに「錦を刺繡したように美しい山と川」という意味で、朝鮮半島を指している言葉だ。朝鮮半島に暮らしている人々は、朝鮮半島の領土を三千里だと慣習的に使っている。「無窮」は現在、韓国の国花だ。しかし、古代のさまざまな記録を調べると朝鮮半島を象徴している花としてたくさん登場している。

これから取り上げる校歌を朝鮮語で見た在日朝鮮人の子どもたちは、日本社会で生きるごちなさから自分たちの「違和感」を持ち、周りの日本人からの差別について、「自分で考え説明しようとする」理論家になることのスタート時点に立たされたことに筆者は注目したいのだ。

(2) 金剛学校（金剛小学校、金剛中学校、金剛高等学校）

1946年金剛学園が始まった場所は、大阪市西成区だった。当時西成地域は在日朝鮮人たちが多く居住している地域だった。金剛学園については次のように記録が残っている。

解放とともに西成でも「在日本朝鮮人連盟（以下朝連）西成支部」が結成された（1945年11月）。結成直後から地域で民族教育の重要性が論議され、1946年初期から天下茶屋一帯の同胞たちの石鹸業者たちが寄付金を出し、4月新学期から地域内の日本人小学校を借りて「朝鮮人小学校」を開校した。一方、朝連の社会的傾向に反発して1946年10月「在日本朝鮮人居留民団（以下居留民団）」²³が結成された。西成でも1947年9月25日「(居留)民団西成支部」が結成された。民団支部を中心に「西成朝鮮人小学校建立期成会」を作り、正式な学校建立に拍車をかけた。1948年、地域の在日朝鮮人のから寄付金を集めて学校を建設した。左右対立の状況から民団側と朝連側が妥協して中立教育を標榜した。²⁴

設立当時、西成周辺地域には数多くの在日朝鮮人がいた。「ウリハッキョ（私たちの学校）」が始まったという話に、在日朝鮮人が集まって子どもたちを入学させた。当時、「ウリハッキョ」が始まって学生たちを募集するために、学校の教師たちは朝鮮人が暮らしている家々を訪ねて学生たちを集めたという。また「ウリハッキョ」に対する在日朝鮮人の期待も大きかった。学校は作ったが、きちんとした校舎がなく、1947年11月、民団西成支部とともに校舎建築資金の寄付活動を進めた²⁵。寄付活動を始めて一ヶ月も経たないうちに約230万円が集まった。現金以外に、木材やセメントを寄付している人も多かった²⁶。この助成金を用いて、1948年3月29日には木造1階、7クラスの教室を備えた学校の建物が竣工された。木造1階に教職員室一つ、宿直室一つと7クラスの教室を備えた建物だった。当時、隣人の日本の学校で学んでいた子どもたちを呼びよせて「西成朝鮮人小学校」という新しい学校で出発した。

ところで、学校の建物が完成してまもなく、日本の「朝鮮学校閉鎖令」によって学校が閉鎖さ

れた。学校が閉鎖されると、当時居留民団と学校関係者たちは、1949年「財団法人金剛学園設立趣意書」を作成して、1950年2月10日、大阪府知事宛に「財団法人金剛学園金剛小学校設立認可申請書」を提出した。申請書には金剛学校設立目的に「本校は日本教育の基本法及び学校教育法によって在日大韓民国児童の小学校における義務教育課程を修業することを目的にする」と明示されていた。1950年3月14日当時、日本の文部省から正式に認可され、4月1日に学校は再び始まった。金剛学校の場合、小学校とともに保育園を開園して男児5名と女児8名が入園した。周囲の日本の学校へ離れ離れになった学生たちも再会することができた。ところで、新しく日本政府の正式な教育機関になった学校では、日本語で授業を行うしかなかった。よその学校に行つて再び戻ってきた金剛学校1期生の関成基の話を通して、このような事実を確認することができる。現在、日本にある民族学校の中で、朝鮮学校は学校で日常的な言語や授業はハンゲルで行われている。しかし日本政府から認定された正式な学校の建国学校、金剛学校、京都国際学院は日本語で授業を実施している。このことは、一般的に在日韓国・朝鮮人社会では、韓国学校出身者が朝鮮学校出身の学生たちに比べて韓国語が下手な理由の一つである。しかし一部の学生たちの言葉が下手だけで、学生たちが学校で志向している教育目標は「祖国」を忘れない人材を育成することだった。当時の校歌を調べると、このような側面がはっきり浮き彫りになる。²⁷

백두산 힘찬 줄기 한라산까지
 배달의 피를 받은 한 뿌리 민족
 현해탄 파도 넘어 이역의 연도
 우리의 슬기로운 한국의 학원
 그 이름 높도다 금강의 학원
 영원히 빛나라 금강의 학원

白頭山力強い山脈漢拏山まで
 韓民族の血を受け継いだ一つの根の民族(単一民族)
 玄海灘の波を越えて異域の沿道
 われらの賢明な韓国の学園
 その名は高いのだ 金剛の学園
 永遠に輝け 金剛の学園



〈1948年3月設立された金剛学校校舎〉

校歌に登場している「漢拏山」は韓国の南島の済州島にある標高1950mの山だ。普通、朝鮮半島では白頭から漢拏までを朝鮮半島全体の領土だと見なしている。「倍達」という用語は、「倍達民族・倍達同胞・倍達魂・倍達族歴史」等、韓民族と関連するさまざまな単語と合成し、近代以後現在

に至るまで使われている言葉だ。「倍達」の語源は、檀君の「檀」を「樺または倍達」で呼ぶことから由来している。²⁸

(3) 京都国際学院

京都は伝統的に日本の織物産業が発達した地域だ。織物産業には多くの労働力が必要で、植民

地時期を経て朝鮮人労働者が数多く居住していた。織物中心地域の京都西陣を中心に多くの朝鮮人が居住していた。解放になって、京都地域でも朝鮮人のための教育の必要性を感じている人が多かった。七條学校、建国学校、西院学園、落上学校、青同学園、堀川学園等37箇所の「ウリ小学校」があった²⁹。このような状況で教科書、教員養成、学校運営秩序の確立、そして「ウリハッキョ」卒業生のための中学校設立の問題が台頭した。これに京都の有力者たちが「京都朝鮮人教育会」を創った。「京都朝鮮人教育会」は教育事業と文化事業を推進しながら、京都朝鮮中学校の設立のために寄付金活動を行った。寄付金活動と同時に京都にいる在日朝鮮人に中学校を設立することへの必要性を力説した。設立趣旨書には次のように書かれている。

解放以後、私たちの子女は何も考えず日本の小学校あるいは中学校を中退し、他の就学方法もなく、毎日が変わっていく思潮に流されて前途を蝕んでいる。祖国建設の英才にならない彼らのことを台無しにする現況を注視する時、より一層心が痛み涙を禁じ得ないだけでなく、気持ちを押し量るように耐えがたき想いに駆られた私たちは今回、奮い立ち、京都に真っ先に中学校一か所でも設立しようと着手したのだ。在留同胞の皆さん！我々は明日の栄光のために今日の辛さを克服しなければならず、2世の国民を善良に教育するために一時的な感情あるいは自己主義の主張は犠牲にし、後日一致団結して不備を完備するように成すことが我々がすることではないかと思えます。³⁰

以後、新聞広告等を通じて学生たちを募集し、1947年5月3日に京都朝鮮中学校が開校した。開校当時、愛国歌³¹を合唱し、始まった開会式には保護者約130名、学生約120名が参加した。5月15日に行われた入学式を経て、17日には補欠入学試験、そして実際の授業は5月19日から始まった。

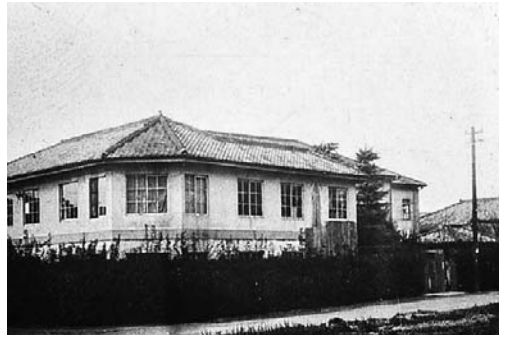
当時、学生数は150名、教職員は教師兼校長代理として俞錫溶等、専任講師4名、講師5名だった。入学資格は専修科が小学校高等科卒業以上の学歴を有する者で25歳以下の男女だった。また、現在の教訓に該当する教領で、「一、自由精神を持って勉強すること。一、自主精神を持って自力を発揮すること。一、自治精神を持って自立すること。一、愛国心を持って自立していくこと。一、四大精神を持って四海を愛すること。一、学問を磨くことで真理を探究すること。」等があった。学校の設立理念を込めて校歌も歌った。校歌は次の通りである。

東海 바다 건너서 야마토 땅은
거룩한 우리 조상 옛적 꿈자리
아침저녁 몸과 덕닦는
우리의 정다운 보금자리 한국의 학원³²

東海を渡りし大和の地は
聖なるわが祖先いにしえの夢の場所
朝な夕なに体と徳を磨く
われらのなつかしきふるさと韓国の学び舎

東海は韓国と日本のある海を意味する。すでに前述した二つの学校と異なり、京都国際学

院の校歌は、「大和」に言及していることが大きな特徴である。日本の古代国家の完成期に存在していた「大和」は、朝鮮半島から渡ってきた渡来人とも関連性があるだろう。「わが祖先いにしへの夢の場所」だと述べながら、日本に渡った人々の新しい場だと明らかにしている。第4節まで続く京都国際学院の校歌は、やはり、朝鮮半島に根をおく民族のことを忘れず³³、気丈に日本で生活することを強調しているのだ。



〈1947年設立当時の京都中学校〉

終わりに

1945年敗戦後、日本で生活するように強いられた在日朝鮮人は後世のために学校を建てた。最初、朝連を中心に多くの民族学校が創立された。朝連が社会主義へ流れると、これに反対する人たちが「在日本朝鮮居留民団」を結成した。現在、在日韓国・朝鮮人を対象としている民族学校の中で、関西地域には3カ所の韓国学校がある。これらはすべて韓国政府の認可を受けると同時に、日本でも一条校で学歴が認められている。

本稿で、述べた関西韓国学校は、日本の韓国学校の現在を垣間見る出発点だと思われる。韓国学校がはじめて開校した当時、学生たち全員の故郷（本籍）は朝鮮（韓国）だった。関西韓国学校は、教育から疎外を受けた在日朝鮮人の教育を多く担ってきた。時には朝鮮半島の不安定な情勢から逃れてきた、所謂、不法入国者にも教育の機会を与えた。関西地域の韓国学校では、一般教科以外に韓国と関連した多様な内容を学んでいる。授業は日本語で行われても、韓国歴史・国語（韓国語）・韓国伝統舞踊等多くの内容を習得することができた。日本の学校では学ぶことができない内容を通して、日本社会を生き抜ける自分たちの存在を認識するとともに、その日々を体験しながら自分たちのアイデンティティに気づくようになった。戦後、日本社会で生きぬくためのさまざまな経験の中で、一つが韓国学校での「学び」ではなかったかと思われる。さらに、南北分断の中、1960年代には北朝鮮への友好的な眼差しから韓国に対しての自負心へつなぐこともできた³⁴。韓国学校で彼ら・彼女らが受けた教育は経験や思い出としてのみならず、次の世代へつなぐ架け橋になったのではないだろうか。一方、2022年現在、在日韓国学校には韓国籍だけではなく、同胞2・3・4世、日本人、朝鮮族³⁵の人たちが一緒に学んでいる。このような多様化については、過去の韓国学校の性格や現在の韓国学校が変化した様子を視野に入れながら、「書記言語教育の可能性」として、今後、考察する必要があるだろう。

注

- ¹ 「在日」とは、植民地時代に強制連行・徴用・仕事などの関係で朝鮮半島から渡航してきた者であり、戦後になっても母国に帰られず残った人や、一度朝鮮半島に帰還したものの、経済・政治の不安定な状況から改めて日本に渡航して定住した人を指す。しかし現在、学界では時代別に「在日朝鮮人」「在日韓国・朝鮮人」「在日コリアン」のような呼称問題が起きるほど、大変政治的な言葉である。本稿では、戦後から1965年までの「在日」を「在日朝鮮人」として呼ぶことにしたい。因みに、「在日コリアン」は1990年以降国籍によって分断されている「在日」を「朝鮮半島の統一」の思いを込めて広がった。
- ² 金泰泳（2006）「在日コリアン教育と民族アイデンティティ」雑誌『三千里』、『青丘』にみられる在日コリアンの教育言説」、韓国民族文化27号、釜山大学韓国民族文化研究所、234頁
- ³ 同上、235頁
- ⁴ 筆者たちの国籍に基づいての呼称である。
- ⁵ ここで「国語」とは、母国の韓国語（朝鮮語）を意味した。
- ⁶ 鄭榮桓（2019）「四・二四教育闘争と在日朝鮮人の民族教育：暴力の痕跡と連帯の記憶」創作と批評186号、88頁
- ⁷ 同上／韓東賢（2015）「朝鮮学校処遇の変遷にみる〈排除／同化〉－戦後日本の「排除型社会」への帰結の象徴として－」教育社会学研究第96集、112頁
- ⁸ 吳永鎬（2019）『朝鮮学校の教育史－脱植民地への闘争と創造』明石書店、54頁
- ⁹ 韓東賢（前掲書）、113頁
- ¹⁰ 同上、113頁
- ¹¹ 小沢有作（1973）『在日朝鮮人教育論歴史篇』亜紀書房、213頁／金徳龍（2002）『朝鮮学校の戦後史1945-1972』社会評論社、74頁～75頁
- ¹² 韓東賢（前掲書）、114頁
- ¹³ 志水宏吉（2005）『学力を育てる』岩波新書978、岩波書店、106頁
- ¹⁴ 同上、111頁
- ¹⁵ 羅義圭（2021）「〈暴力性〉を伴わない言語習得は可能か？」『筑紫女学園大学研究紀要』第16号
- ¹⁶ hooks、bell(1994)、『Teaching to transgress: education as the practice of freedom』New York&London: Routledge、59頁
- ¹⁷ 原本は韓国語で作成されている（和訳：羅義圭）。
- ¹⁸ 民団系は、韓国政府の支援を受けている在日韓国人組織で、朝鮮学校は、北朝鮮と関わっている朝鮮総聯と関係を持っている学校を指している。韓国政府に友好的だが、正式な教育機関として認定されていない茨城県青丘学院つくば中・高等学校と茨木市コリア国際学園がある。
- ¹⁹ 神戸一帯で事業家として成功した済州島出身の曹圭訓を中心に、1945年敗戦後、組織した団体。1945年9月20日曹圭訓の自宅で、韓国からきた徴用者たちと祖国復興を实践する会で結成された。決議文

には「祖国の産業と文化建設のために鮮血を流して固く誓う」と書いた。同志会が採択した綱領は次の通りである。「一、我々は一致団結することを誓う。一、我々は祖国と民族を守ることを誓う。一、我々は祖国建設の土台になることを誓う。」

- ²⁰ 白頭学院創立60周年記念誌委員会（2006）『白頭学院創立60周年記念誌』、学校法人白頭学院、240頁
- ²¹ 学校法人白頭学院幼・小・中・高等学校ホーム・ページ、<http://keonguk.ac.jp>（2022年4月15日最終アクセス）
- ²² 学校法人白頭学院幼・小・中・高等学校ホーム・ページ、<http://keonguk.ac.jp>（2022年4月15日最終アクセス）
- ²³ 当時の名称は「居留民団」だったが、1994年から「居留」の2文字を削除し、現名の「在日大韓国民団」に改称。
- ²⁴ 金剛学園40周年記念誌委員会（1986）『日本政府正規学校認可取得創立40周年記念誌』学校法人金剛学園、24頁～25頁
- ²⁵ 当時、多くの朝鮮関連教育機関は近隣の日本人小学校を借りて使用した。西成地域では近隣の松宮小学校と千本小学校の校舎を借りて使用した。
- ²⁶ 学校法人金剛学園（前掲書）、27頁。このような内容は他のインタビューでも確認できる。「私の父が学校を設立した当時はとても貧しい家庭の人々も当時、日本円で10円～100円のお金を互いに出しました。当時大工の日当が200円だった時なので約100倍だともいいでしょう。」〈金鉉修。金剛小学校卒業生。2020年2月20インタビュー〉
- ²⁷ 開校初期の金剛学校校歌は1973年1回変わった。2021年学校名称とシステムを変えると同時にもう一度校歌が変わって、現在校歌は初期の校歌とは相当違う。
- ²⁸ 韓国学中央研究院『韓国民族文化大百科事典』ホーム・ページ、<http://encykorea.aks.ac.kr/Main/Intro>（2022年4月15日アクセス）
- ²⁹ 京都国際学園70周年記念誌委員会（2018）『京都国際学院開校70周年記念誌』学校法人京都国際学園、70頁
- ³⁰ 京都朝鮮中学校設立趣旨書
- ³¹ 韓国の国歌
- ³² 京都朝鮮中学校設立趣旨書
- ³³ 第4節は「힘차게 일어나라 대한의 자손/ 새로운 희망길을 안아갈 때에 불꽃같이 타는 밤/ 이국 땅에서 어두움을 밝히는 등 불이 되자（力強く立ち上がれ大韓の子孫／新しい希望の道を抱きしめる時に花火のように燃える夜／異国の地で暗闇を明かす灯火になろう）」
- ³⁴ 韓清光。金剛小・中学校1期生。1965年から2001年まで金剛学校勤務。退職後、「在学・勤務」期間の事実を記録に残した。当時の校歌も韓清光氏の記録に基づいて述べている。2022年4月19日書面を通じてのインタビュー。（……僕は金剛学園で小中を卒業しましたが、大学で経験したのは、韓国より北朝鮮礼賛の時代でした。何しろ日本の報道陣や文化人まで北朝鮮は理想の国であり、地上の楽園であると北朝鮮に行くことをあおり、そのため10万人の人が北朝鮮に行ったのです。僕はそういう言葉に

惑わされなかったことが、金剛学園で教育を受けた結果であると思っています。)

³⁵ 日本植民地時代を前後に、中国東北地方に移住した朝鮮人。彼らは現在、中国国籍であり、中国で56の少数民族の一つ。

【付記】

本稿は、2021年度筑紫女学園大学特別研究助成（一般）を受けて行われた研究の成果である。

（ラ・イギユ：筑紫女学園大学 非常勤講師）

（パク・ソンギ：韓国ソウル市立大学国史学科 博士後期課程修了）

戦後朝鮮語教育への萌芽
—関西在日韓国学校の初期設立を中心に—

羅 義 圭・朴 星 奇

The Beginnings of Postwar Korean Language Education:
Focusing on the Early Establishment of Korean Ethnic Schools in Kansai

Euikyu LA and Seongkee PARK

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報

第33号
2022年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 33
2022